

4 校内研修全体計画

1 研究主題

豊かな心で主体的に活動し、よりよい生活を創り出す子供の育成
 ～特別活動と道徳科とが響き合い、子供が活躍する道徳教育の推進～

2 研究主題設定の理由

(1) 今日の課題から

グローバル化の進展などにより、世界が急速に変化する中であって、未来は不確実で、予測することが困難になってきた。平成 28 年4月の熊本地震や令和2年2月から始まったコロナ禍での新生活様式は、この状況を一層顕在化・加速化させた。このように不確実な未来ではあるが、2018 年 OECD のポジションペーパー¹⁾の中で「学びの羅針盤」が示されている。そこでは、DeSeCo プロジェクトで定義したキー・コンピテンシーに立脚して、さらに①新たな価値を創造する力、②対立やジレンマを克服する力、③責任ある行動をとる力の3つのコンピテンシー要素を設定し、それらを「変革を起こす力のあるコンピテンシー」とひとまとめにしている。この3つのコンピテンシーは、活動の目標の達成のために、方法や手段などを全員で考え、折り合いをつけながら話し合い、自分の役割や責任を果たすとともに、それを協力して実践し、学級文化を創造していく特別活動の在り方と軌を一にしている。これらは、非認知的能力とも呼ばれ、いま世界中で注目されている。前田²⁾はその理由を「変化が激しく予測がしにくい未来社会では、解決が難しい問題に協力して立ち向かうための力が求められている。」と述べている。

1) 文部科学省, OECD Education 2030 プロジェクトについて

2) 前田 康裕熊本大学教職員大学准教授:熊本日新聞夕刊 2019年9月9日

(2) 教育目標の具現化のために

【学校教育目標】 豊かな心で主体的に活動し、みんなが「わくわく」する学校創り

～子供たちが帯西レンジャーと共に活躍する学校～

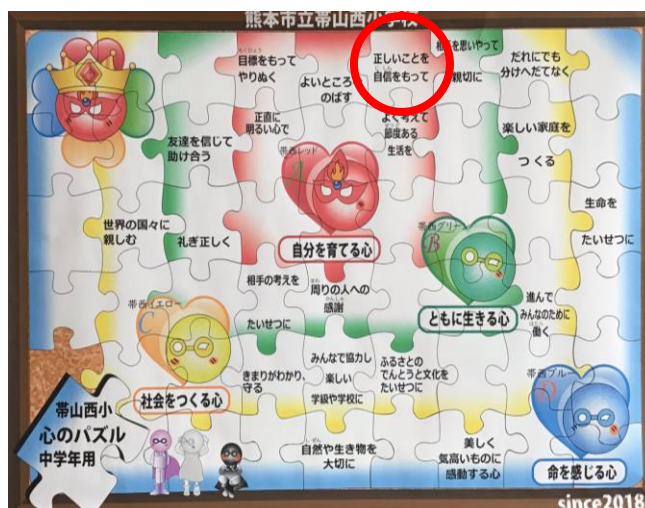
本校の教育目標の具現化を図るために、特別活動と道徳の充実に取り組んでいく。「帯西レンジャー」とは、道徳の4つの視点を図1のように意味付けしたものである。

A:主として自分自身に関すること	B:主として人との関わりに関すること	C:主として集団や社会との関わりに関すること	D:主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
帯西レッド 「自分を育てる心」  自分を育てる心	帯西グリーン 「ともに生きる心」  ともに生きる心	帯西イエロー 「社会をつくる心」  社会をつくる心	帯西ブルー 「命を感じる心」  命を感じる心

【図1】帯西レンジャーに意味付けした「4つの心」

さらに、「4つの心」を活かしつつ、道徳科の内容項目をパズルのピースに置き換えて示した、「心のパズル」の活用を図っていく。「心のパズル」(図2)は、4つの視点をA⇒B⇒C⇒Dの順に同心円状で表し、小学校

低・中・高学年から、中学校まであり、系統性を踏まえている。例えばAの「主として自分自身に関すること」の「善悪の判断、自律、自由と責任」の内容項目を表すピースは、小学校低学年では「よいことわるいこと」、中学年では「正しいことを自信をもって」、高学年では「しっかり考えて責任ある行動を」、中学校では、「自ら判断・行動し結果に責任をもつ」とし、子供たちが口ずさみやすいように表記している。



【図2】心のパズル(中学年用)

(3) これまでの研究の歩みから

令和2・3年度、特別活動の中の学級活動(1)に焦点化し、研究を進めてきた。実践を通して、多くの職員が学級活動(1)の基本的な指導方法を理解し、自主的、実践的な活動を展開していくために重要なポイントを意識しながら実践するプロセスを学んできた。児童も学級や委員会活動の中で様々なイベントを開催したり、課題を解決したりすることに意欲的に取り組んでいた。ただ、活動の振り返りの仕方や、めあてや目標をもって取り組む活動においては、共通の実践や工夫が必要だという声も聞かれた。

そこで、令和4年度からは、特別活動に、教育活動全体を通じて行う道徳教育を加え、学校教育目標に近づいていけるよう、本研究主題を設定して取り組んでいる。まず、集団として高め合い一人一人の力を伸ばすための学級目標に「4つの心」を取り入れる。次に、その学級目標を基に、子供が各自で個人目標を決め、全ての学校生活で意識して臨む。そして、道徳でも特別活動でも他の活動でも、常に「帯西レンジャー」を拠り所として活動を振り返る。そうすることで、反省と改善を繰り返しやすいとなり、どの視点が伸びたのか成長を実感したり、役割意識や自己有用感を高めたりすることができる。

3 研究構想および視点

(1) 目指す子供像

- 心豊かで思いやりのある子供
- 日常生活上の問題から課題等に気付く子供
- 課題等の解決の仕方を考え、解決のために積極的に行動する子供

(2) 目指す教職員像

- 子供の思いや願いを大切に、子供と協同して学校を創ろうとする教職員

(3) 研究の仮説

「4つの心」(道徳科の4つの視点)を評価ツールとして活用しながら、道徳科と特別活動を中心に、すべての教育活動において道徳教育の推進及び充実を図れば、子供は自分や友達の行いを「4つの心」で価値づけたり、振り返ったりする力が伸び、自己有用感を高めながら自分の成長を実感することができ、研究主題に迫ることができると考えられる。

(4) 研究の視点

【視点1】「4つの心」の設定・活用

- ① 道徳科の4つの視点を取り入れた学校努力目標の設定
- ② 「4つの心」の設定
- ③ 「4つの心」を活かした学級目標の設定・活用

【視点2】「焦点化」「共有化」による授業改善

- ① 道徳的価値の自覚を深めるための焦点化と共有化による道徳科の授業改善
- ② 合意形成を図るための焦点化と共有化による学級活動(1)の授業改善
- ③ 意思決定を図るための焦点化と共有化による学級活動内容(2)内容(3)の授業改善

	焦点化・・・ 8割は「準備」で決まる	共有化
道徳	教師が児童にどのようなことに気付いてほしいのか、 <u>教師の指導の意図を明確にし、教材文を通してそこに近づくこと。</u>	「気づかせたい心」を児童の言葉で整理し、学級全体で共有することであり、共有したことを一人一人が自分自身を見つめる窓口とすること。
学級活動	計画委員会の話し合いを通して、 <u>提案理由における最も重要な点を明らかにし、話し合いを通してそこに近づくこと。</u>	焦点化されたものを、教師あるいは児童の言葉で表現し、学級全員で共有することであり、それを生かして、意見を「くらべ合う」根拠とすること。

道徳や学級活動は週に1時間なので、全教科・全教育活動で実践する。

【視点3】「4つの心」を生かした評価・環境設営

- ① 子供が自らの成長を実感するための「4つの心」を生かした評価の工夫
- ② 「4つの心」を活かした環境設営

(5) 研究の構想図

